

平成 22 年 6 月 3 日現在

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19320062

研究課題名（和文）形態的言語類型論の再構築-語構造の異なる言語の比較対照をとおして-

研究課題名（英文）Rethinking Morphological Typology: Through Looking at Languages with Morphologically Different Types of Words

研究代表者

渡辺 己 (WATANABE, Honoré)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：30304570

研究成果の概要（和文）：

形態的類型論はこれまでも幾多の先行研究で見直されてきたが、その両極にある孤立語と複統合語は近年まで特に問題とされずに類型タイプとされてきた。しかし、本研究を通して研究を重ねたところ、特に複統合語と呼ばれている言語にも多様なタイプがあることが明らかになってきた。本研究では一次資料を収集し、それに基づいて研究を展開することも重視した。海外現地調査を通し、特に話者数の少ない言語の貴重なデータを多く収集することができたのも大きな成果である。(200 字程度)

研究成果の概要（英文）：

Linguistic typology based on the types of words, i.e. the morphological structure of words, has a long history; however, the two opposite types, polysynthetic and isolating, have not been thoroughly questioned as regards their characteristics. Through this project, it became evident that there are different types within the polysynthetic type. We have collected a significant amount of data through field research of underdocumented languages.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2008 年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2009 年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
年度			
年度			
総計	14,500,000	4,350,000	18,850,000

研究分野：人類学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：形態論，言語類型論，言語学，セイリッシュ語，カレン語，中国語，ヌートカ語

## 1. 研究開始当初の背景

まず、本研究立案のきっかけとなったのは、日本言語学会 2005 年度春期大会にて、「抱合と複統合性－フィールドからみえてくる言

語の多様性」と題したワークショップをおこなったことである。

このワークショップでは研究代表者・渡辺が司会・発表をおこなった他、研究分担者・中

山と研究協力者・宮岡が発表および討議をした。このワークショップのために、渡辺・中山・宮岡の3人は、打ち合わせに数度集まり準備をした。そこであらためて分かったのは、「複統合性」という概念が実は非常に曖昧であるということであった。通常、複統合性というと、一語のなかに多くの形態素を含みうる言語とされるが、それでは実際、一語にいくつ以上の形態素が含まれれば、ある言語を複統合語だと呼べるのかという点については、ほとんど触れられたことがない。渡辺と中山がそれぞれ専門とするスライアモン語とヌートカ語も、人称標識・テンス・アスペクトなどを接辞で一語に盛り込むゆえ、複統合語とされているが、典型的な複統合語として常にあげられるエスキモー語のように、数多くの形態素が一語に盛り込まれることはない。

その一方で、一語が一形態素からなるとされる孤立語というタイプ、そしてその代表例としてあげられる中国語も、実際の言語現象はそれほど単純なものではないことが研究者によって指摘されるようになってきた。特に現代中国語では、語と語が結合し、合成語を多く形成することが指摘されている。すなわち一語が一形態素からなるとは必ずしも言えず、ふたつ以上の形態素から構成されることも多い。

以上のように、複統合語と孤立語というふたつのタイプは、それぞれ、これまで考えられてきたように単純に定義づけられるものではない。それぞれの特徴をさらに突き詰めて考察する必要がある。しかし、本研究にかかわる研究者は、ひとつのタイプの言語だけを観察しても、行き詰まってしまうことにそれぞれ独自に気がつき始めた。そこで、特に上記のワークショップのあとに非公式にお互いの意見を交換するなかで、まったく異なると言われている両タイプの言語を比較対照することによって、それぞれのタイプをひとつのタイプとしている特徴が見えてくるのではないかということ強く感じるようになった。

そこで、複統合語と孤立語という、形態的類型において両極端にあるとされている言語を専門に研究してきた者が集まり、それぞれの言語の観点から、協議し共同研究をする機会を設けようというのが、本研究の立案に至った背景と経緯である。

## 2. 研究の目的

本研究は、形態的類型論で対局に位置づけられる複統合語および孤立語の文法構造を総合的に比較することをとおして、語構造をもとに比較・分類をおこなう類型論を再考察することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1)本研究では、研究の基礎となる資料を研究代表者および分担者がそれぞれ自らの現地調査で収集することをおこなった。これは複数の言語を比較対照しておこなわれる類型論的研究において、研究はえてして他の研究者が得たデータを二次的に使用することが多いことへの反省を含めてのことである。

(2)自らが専門とする研究対象言語の調査の際には、自然談話を重視することとした。すなわち、媒介言語を対象言語の話者に訳してもらい「聞き取り」の方法になるべく頼らずに、自然談話を収集し、そのなかでどのように統合度の異なる語が出てくるかを調査した。

(3)本研究参加メンバー間では密に連絡を取り合い、常に一次資料を基に議論を進めてきた。

## 4. 研究成果

(1)自然談話のなかでの実際の言語運用を観察することによって、複統合語とされる言語でも、統合度が高い語ばかりが使用されるのではないことが闡明になり、その一方では孤立語とされる言語でも、必ずしも一語が一形態素で現われるばかりではないことも分かってきた。

(2)海外における現地調査を通し、本研究参加者の専門とする言語の一次資料を多く得ることができた。これは本研究の期間で終わるわけではないそれぞれの言語の研究のための基礎的資料となるものであり、その学術的価値は非常に高い。

(3)本研究の成果として専門的論文と口頭発表をおこなうとともに、本研究を通して考察した成果の一旦として、初学者あるいは一般向けに啓蒙的な論考、書籍、講演などをおこなった。論文・論考等は計16点、口頭発表・講演等は計35点、書籍は4点を数えるに至った。

(4)地域も系統もタイプも異なる言語を専門としている研究者同士が共同でそれぞれの研究対象言語について議論をする機会は少ないが、本研究はその良い機会となり、今後の研究につなげられる可能性が見えてきたと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 16 件)

- (1) 渡辺己, 「スライアモン・セイリッシュ語のクリティックについて—その形式的同定のための基準—」, 『アジア・アフリカの言語と言語学 2』, 査読有, 2007, p. 115-130
  - (2) 渡辺己, 「スライアモン・セイリッシュ語の品詞について—特にその名詞と動詞について—」, 『アジア・アフリカの言語と言語学 3』, 査読有, 2008, p. 117-134
  - (3) Watanabe, Honoré, “A Look at Noun and Verb in Sliammon.”, In David Beck (ed.), A Festschrift for Thomas M.Hess: from his Friends and Colleagues in Honour of his Seventieth Birthday. Missoula (Montana): University of Montana., 査読有, 2010, p.174-191(in press)
  - (4) 渡辺己, 「セイリッシュ語」, 梶茂樹・中島由美・林徹編『事典 世界のことば141』, 2009, p. 560-563
  - (5) 中山俊秀, 「ヌートカ語」, 中山俊秀・山越康裕編『文法を描く—フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ・2』, 査読無, 2007, p. 197-228
  - (6) 中山俊秀, 「記述の現場から見た形態論」, 査読無, 月刊『言語』, 2007, p. 34-41
  - (7) NAKAYAMA, Toshihide, “A Survey of Polysynthetic Word Formation in Nuuchahnulth”, Tugus Kurebito (ed.) Linguistic Typology of the North. Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies., 査読無, 2008, p. 59-71
  - (8) 中山俊秀, 「新時代の記述言語学 <上> —つながる言語記録にむけて」, 査読無, 月刊『言語』7月号, 2009, p. 66-73
  - (9) 中山俊秀, 「新時代の記述言語学 <下> —ありのままの言語学」, 月刊『言語』8月号, 査読無, 2009, p. 68-75
  - (10) 中山俊秀, 「ヌートカ語」, 梶茂樹・中島由美・林徹編『事典 世界のことば141』, 査読無, 2009, p. 568-571
  - (11) 加藤昌彦, 「ポー・カレン語に形容詞という範疇は必要か?」, 『アジア・アフリカの言語と言語学 3』, 査読有, 2008, p. 169-219
  - (12) Atuhiko KATO, “A basic vocabulary of Htoklibang Pwo Karen with Hpa-an, Kyonbyaw, and Proto-Pwo Karen forms.”, 『アジア・アフリカの言語と言語学 4』, 査読有, 2010, p. 169-218
  - (13) 加藤昌彦, 「ポー・カレン語の「格」」, 澤田英夫(編)『チベット=ビルマ系言語の文法現象 1:格とその周辺』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 査読無, 2010, p. 311-330
  - (14) 沈力, 「漢語蒙受句の語義結構(The Semantics Structure of the Affected Constructions in Chinese)」, 『中国語文』1期, 査読有, 2009, p. 45-53
  - (15) 沈力・馮良珍・津村臣宏, 「用GIS跟踪霍州話構形法的衰退軌跡—以代詞的派生機製為中心—(GISによる霍州方言の形態法衰退の軌跡を探求—代名詞派生メカニズムを中心に)」, 『東方語言学』No.5, 査読有, 2009, p. 104-122
  - (16) 沈力・馮良珍・津村臣宏, 「用GIS分析霍州方言元音谐和律的衰退現象(GISに基づく霍州方言における母音調和の衰退現象の分析)」, 『中国言語学報』No.15, 査読有, 2010, 印刷中
- [学会発表] (計 35 件)
- (1) Watanabe, Honoré, “Filler As a Criterion for Formal Identification of Proclitics in Sliammon Salish”, 10th International Pragmatics Conference, 2007年7月10日, 於Göteborg University (スウェーデン)
  - (2) Watanabe, Honoré, “Causatives in Sliammon Salish”, 18th International Congress of Linguists, 2008年7月21日, 於Korea University (韓国)
  - (3) 渡辺己, 「スライアモン・セイリッシュ語の名詞と動詞の分類について」, 日本言語学会第136回大会, 2008年6月21日, 於学習院大学
  - (4) 渡辺己, “Notes on ‘Insubordination’ in Sliammon Salish”, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト『言語の多様性と言語理論—「語」の内部構造と統語機能を中心に』研究会, 2009年6月13日, 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

- (5) Watanabe, Honoré, “Word Classes in Sliammon Salish”, Talk at Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, 2009年11月23日, 於 Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology (ドイツ)
- (6) Watanabe, Honoré, “Insubordinating Use of Formally Subordinate Clause in Sliammon Salish”, 2010 SSILA, 2010年1月7日, 於 Baltimore (米国)
- (7) Watanabe, Honoré, “Insubordination in Sliammon Salish: Independent Uses of Nominalized Clauses”, Talk at Informal Field Linguistics Seminars, 2010年3月5日, 於 Australian National University (オーストラリア)
- (8) 加藤昌彦, 「ポー・カレン語の「格」」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「チベット=ビルマ系言語からみた文法現象の再構築1」, 2007年11月18日, 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- (9) 加藤昌彦, 「‘Htoklibang’ Pwo Karen 語の初期報告ならびに Proto-Pwo の再建」, チベット=ビルマ言語学研究会, 2008年4月19日, 於京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター
- (10) 加藤昌彦, 「ポー・カレン語の3種の関係節---「後置型」「前置型」「標識介在型」」, 日本言語学会第136回大会, 2008年6月21日, 於学習院大学
- (11) Atsuhiko KATO, “A first report on ‘Htoklibang’ Pwo Karen and reconstruction of the Proto-Pwo phonemic system”, 第41回国際シナ・チベット言語学会議(ICSTLL), 2008年9月19日, 於ロンドン大学(英国)
- (12) 加藤昌彦, 「ビルマ語の「上」を表す名詞の後置詞的用法について」, チベット=ビルマ言語学研究会, 2008年12月6日, 於神戸学園都市 UNITY
- (13) 加藤昌彦, 「ポー・カレン語の文の分類」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「チベット=ビルマ系言語からみた文法現象の再構築2」, 2010年3月13日, 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- (14) 沈力, 「ことばは世界をどう捉えるか: 中国語の結果構文と事象構造」, 2007中日理論言語学研究フォーラム: パネルディスカッション, 2007年9月1日, 於北京大学(中国)
- (15) 沈力, 「北京話了2的來源」, 第三回晋語研究国際会議, 2007年8月12日, 於山西大学(中国)
- (16) 沈力, “On the light Verb DE in Chinese.”, The 16th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics, 2008年5月29-6月1日, 於北京大学(中国)
- (17) 沈力, 「漢語名量詞後置現象的分析」, 第十五次全国現代漢語語法學術フォーラム, 2008年7月12-14日, 於延辺大学(中国)
- (18) 沈力, 「霍州内部方言拡散の数理分析」, 中国語学会第14届學術年会, 2008年8月28-30日, 於温州大学(中国)
- (19) 沈力, 「霍州内部方言拡散の数理分析-以兒變韻為中心」, 日本中国語学会関西支部会例会, 2008年12月14日, 於同志社大学
- (20) 沈力, 「事象構造に関する日中対照研究の展望-とくに使役表現をめぐる」, 2009中日理論言語学国際フォーラム、パネルディスカッション, 2009年7月26日, 於同志社大学
- (21) 沈力, 「“时”考-談实詞虚化的走向与語言形态特征的关系-」, 第三回中日韓・中国言語学国際學術討論会, 2009年9月20日, 於山東大学
- (22) 沈力, 「霍州方言の分布に関する数理分析-交流度の提案-」, 科研費による国際シンポジウム: データ科学の新領域の開拓-文化財データの分析とアーカイブ-, 2010年1月28日, 於同志社大学
- (23) 張勤・星英仁・沈力・金明哲, 「中日事象表現データベースの構築について」, 2009中日理論言語学国際フォーラム, 2009年7月26日, 於同志社大学
- (24) 中山俊秀, 「ヌートカ語における名詞化」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト『言語の多様性と言語理論: 記述的研究コミュニ

ニティー構築部会』名詞化ワークショップ研究会1, 2007年6月24日, 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

(25) NAKAYAMA, Toshihide, "ELPR and other Initiatives in Japan", National Science Foundation's Workshop on Documenting Endangered Languages, 2007年10月15-16日, 於University of New Hampshire: Durham, New Hampshire (米国)

(26) NAKAYAMA, Toshihide, "Anatomy of Polysynthetic Word Formation in Nuuchahnulth", Linguistics Colloquium, Linguistics Department, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, 2008年1月, 於Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology (ドイツ)

(27) NAKAYAMA, Toshihide, "Initiative for building an infrastructure in support of language documentation", First International Conference on Language Documentation and Conservation, 2009年3月13日, 於University of Hawai'i, Manoa (米国)

(28) 中山俊秀, 「言語ダイナミクス科学のめざすもの」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト『言語の多様性と言語理論—「語」の内部構造と統語機能を中心に』研究会, 2009年1月31日, 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

(29) 中山俊秀, 「今どきの品詞分類・議論の出発点として」, 日本言語学会第136回大会ワークショップ『言語の構造的多様性のなかでの品詞分類』, 2008年6月21日, 於学習院大学

(30) 中山俊秀, 「コンテクストを意識した記述研究」, 琉球諸語記述研究会第4回琉球語ワークショップ, 2010年3月14日, 於琉球大学

(31) 中山俊秀, 「項構造の悩ましさ」, 第2回動詞項構造研究会, 2010年3月8日, 於名古屋大学

(32) 中山俊秀, 「つながる言語記録研究へ」, 第2回琉球継承言語研究に関するワークショップ, 2010年3月6日, 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

(33) 中山俊秀, 「いろいろなことば」, 明星学園小学校招待講演, 2010年3月4日, 於明星学園小学校

(34) NAKAYAMA, Toshihide, "Grammaticalization and pragmatic motivations in clause combining: a case study in Nuuchahnulth.", International Pragmatics Association, 11th International Pragmatics Conference, 2009年7月16日, 於University of Melbourne (オーストラリア)

(35) NAKAYAMA, Toshihide, "Fieldling: An initiative toward the brighter future of field linguistics in Japan.", Institute of Linguistics, Russian Academic of Science, 3rd International Conference on Field Linguistics, 2009年10月19日, 於Institute of Linguistics, Russian Academic of Science (ロシア)

〔図書〕(計4件)

(1) 加藤昌彦(監修), 『見て・書いて・読んでみる ビルマ文字』, 東京:同友館, 2007, 総ページ数:55頁

(2) 沈力・趙華敏, 「中国語の名量詞後置文の分析」(『語彙の意味と文法』), くろしお出版, 2009, 総ページ数:533頁

(3) 沈力(由本陽子・岸本秀樹), 『漢日理論言語学研究』, 東京:同友館, 2009, 総ページ数:404頁

(4) 沈力・林宗宏, 「中国語の結果構文と事象構造」(『漢日理論言語学研究』), 学苑出版社, 2009, pp.197-209

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

渡辺 己 (ワタナベ オノレ)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号: 30304570

### (2) 研究分担者

加藤 昌彦 (カトウ アツヒコ)

大阪大学大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号: 30290927

沈 力 (シン リキ)

同志社大学文化情報学部・教授

研究者番号: 90288605

中山 俊秀 (ナカヤマ トシヒデ)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化

研究所・准教授

研究者番号：70334448